

子どもの困った言動を考えてみよう



香川県臨床心理士会 会長 豊島佳津子

子育ての悩みには不登校や警察沙汰のような、日常生活が突然崩れてしまうように感じることもあれば、毎日の生活で繰り返されてうんざりするような困ったこともあるでしょう。

あるお母さんは、這い這いを覚えた赤ちゃんが動き回り、目が話せないことに疲れていました。気が休まらないという愚痴を伺う時期が過ぎ、しばらく経つと今度は「これしててね」というと「うん」と答え、「わかった?」と聞くと「わかった」と答えるけれど、結局言いつけを守らないことに困っていました。しばらくすると今度は、何を言ってもまずは「いや!」ということに手を焼いていました。こんな風に、子育ての中心にいるお母さんは、子どもの発達に伴い、その時その時に出現した出来事に手こずらされ続けているように感じるのですが、裏を返せばこの手の問題は、そんなに厳しく叱りつけなくても、気づけば終わっているものです。まずは「これは永遠に続くものではない」と思うことや、「厄介が増えるのは順調に育っている証拠」と思うことは、子育てという長い道のりを乗り切るコツと言えるでしょう。また、思い返すと嫌なことばかりではなく、結構楽しい思い出もさせてもらっています。嫌なことに目を向け過ぎず、この時期ならではの出来事を楽しむことはさらにお勧めです。

さて、こどもが少し大きくなった時の悩みで「こどもが嫌いなものを、食べたと言ってこっそり捨てる」というものがありました。実は私自身、小学生の低学年の時に嫌いな給食ではそうした記憶があります。この相談は結構多いので、好き嫌いが多い子どもをお持ちの保護者さんには「ある!ある!」かもしれません。「食べ物を粗末にはしてはいけませんよ」ときつく叱るのに一向に止めない、と言われるので、ならば、「残していいよ」とか、「いらぬならいらぬって言っていいよ」と伝えてみては?とアドバイスするのですが、その相談をされる方は簡単に「分かりました」とはなりません。その方なりに「思い」があって食べきってもらいたいのです。逆に子どもの側の気持ちになれば、この人(保護者や先生)は自分が食べたくない気持ちを受け取ってくれる余地がないと感じ、さらに相手の方が強くて逆らえない部分があるからこそ、こっそり捨てるを得ないのです。相談してくれた方々は、こっそり捨てられるくらいなら・・・と、残す、食べないという選択を認め、子どもの言い分を受け取ってくれました。こっそり捨てていることを叱らずに、「欲しくなければ言ってくれたらいいからね」と、何度かやり取りをするうちに、「実は嫌い」とか「今日はいらぬ」と言えるようになり、こっそり捨てることはなくなったし、子どもが言いたいことを言うようになって、意思疎通が進み、子どもとの関係が良くなったと報告してくださいました。この戦いですが、大人が歩み寄ることに思い至らず叱り続けたケースでは高校生になってもこっそり捨てるが続いていました。(ですが親御さんが、自分の期待とは違うお子さんの正直な気持ちを受け取れるようになってからは、いらぬと言えるようになり、こっそり捨てることはそのうちになくなりました。)

ちなみに私は残すことを認めてくれたり「嫌いなものは先に退けても良い」というルール of 担任が変わって以降、こっそりしなくて済むようになりました。味覚は成長とともに変化し好き嫌いも相当少なくなっていくます。やはり大人が歩み寄ることが問題解決の鍵のようです。